

〔研究ノート〕

ドロッカーの業績とその歴史的貢献

(その2)

——『大転換』、『経営者革命』および『産業社会』—— (上)

堤 達 朗

はじめに

I 『大転換』と『経済人の終り』

1. ポラニーとドロッカーの交友関係
2. 「経済人」概念について
3. 「社会」と「経済」——その関係の逆転——
4. 「教義の崩壊」と「社会システムの崩壊」
5. 最初の転換——「統制的市場から自己調整市場へ」——
6. 「社会の自己防衛」
7. 「階級闘争」について
8. 「世紀の基本的経験」とは
9. 「階級構造の変容」について
10. 「社会主義」と「産業社会」

…… (以上、本号)

はじめに

ドロッカー業績のうち〈初期〉の業績に属する『経済人の終り』と『産業人の未来』について、この〔研究ノート〕の(その1)において要点の把握を試みた。これによって、ドロッカーの半世紀にわたる業績体系の出発点が何であったかの確認をしたわけである。

そこで、ここでは〈初期業績〉について、同時代的な他者業績との「比較」により、中間的な評価を試みたい。それが、「三題漸」めいた表題を用いる本稿の意図である。

さて、その「三題」であるが、『大転換』はカール・ポラニー、『経営者革命』はジェームス・バーナムのそれぞれの著書のことである。『産業社会』は、「自由にして機能する産業社会」を指向するドラッカーの初版著作のことである。これらを初版の出版年次順に列記すると、次のとおりである。

- ① 『経済人の終り』(*The End of Economic Man*) 1939年
- ② 『経営者革命』(*The Managerial Revolution*) 1941年
- ③ 『産業人の未来』(*The Future of Industrial Man*) 1942年
- ④ 『大転換』(*The Great Transformation*) 1944年

これらの三者の著作に共通することは、いずれも1930年代から40年代にかけて起った世界史的・人類史の変革が何であるかという考察と探究に、その時代のさなかにおいて真正面から挑んでいることである。しかも、同じアメリカの地において相前後して発表されたものであるから、当然、お互いに「共通性と差別性」を認識し、そこから問題意識の相互反応と喚起をし合う関係にあったものといえるであろう。ここに「三題漸」、すなわち「比較」という研究方法が成立する契機があると判断する。

I 『大転換』と『経済人の終り』

1. ポラニーとドラッカーの交友関係¹⁾

次に述べるようなポラニーとドラッカーの交友関係を考慮すると、ドラッカーの『経済人の終り』にとって、ポラニーの『大転換』は、それがまだ著作されていないときから、その考え方、論理的構想において有力なお手本であったと推測できる。

ドラッカーは、1927年、18歳の時であるが、「オーストリア・エコノミスト」の編集会議に招待され、ボラニーの知遇を得る。この時、ボラニーは41歳、同誌の副編集長であり、すでにベテランの域に達した「ライター文筆家」である。ドラッカーが生まれた年の1909年には、すでに「われわれのイデオロギーの危機」と題する論文を発表している²⁾。

この論文は「すぐれて予言的な評論」で、「第1次世界大戦の勃発に先立って現われていた市場経済の失敗というきざしの増大によって予言しえた」コレクティヴィスト・レギュレーション“集産主義的規制”の動向を「社会主義」という用語で表わしていた。それについて、ボラニーは「30年経過してもなお、私の思想の発展を依然として表わしている」と述べている。したがって、この当時において、「大転換」という著作に集大成されていく一定の視角を整えつつあったといえるであろう。

1933年、ヒットラーが政権を握ると、ボラニーもドラッカーも、その暴政を拒否してイギリスに移住する。ドラッカーは、当時を回顧して、「私が彼と頻繁に会い、交友を深めたのは、この頃だった。……カルルがイギリスに来る早々から、私たちは、日曜日の朝、肩を並べて何時間も散歩をする習慣になった。1937年に私と妻がアメリカに渡るとカルルは、アメリカに来るたびに拙宅を訪れるようになった」と書いている。

この時期に、ドラッカーは『経済人の終り』を出版するべく、「ナチズムの根源と、ヨーロッパのリベラリズムとヒューマニズムの伝統の衰退の根源、この両者の分析を試みていた」。この問題意識は、二人の「ライター文筆家」にとって共通のものであり、ドラッカーは、先輩ボラニーから啓発されるところがあったと推測できる。なお、ここで「ライター文筆家」というのは、ドラッカーの自称に従ってのものであり、「意思疎通という仕事に携わる職人であり、その目標は共有すべきビジョンの発見にある」とする者のことである³⁾。

ボラニーは、この時期には、『世界経済恐慌のメカニズム』(*Der Mechanismus der Weltwirtschaftskrise*, 1933), 『ファシズムの本質』(*The Essence of Fascism*,

1935), 『ヨーロッパの今日』(Europe Today, 1937)なる論文を発表するとともに、「イギリスの社会史および経済史の研究に没頭していた」。これらは、いずれも『大転換』へと集大成する礎石であった⁴⁾。

ドラッカーが第2作『産業人の未来』を執筆している頃には、ドラッカーは「カルルによく自分の考えをぶつけてみた」。ドラッカーは、次のように書いている。「彼はいつも興味を示し、熱心に私を励ましてくれたが、私の『保守的アプローチ』〔『産業人の未来』の副題〕には全然同調しなかった。が、そのために彼は、自分の考えを明確にせざるを得なくなった。その結果、彼が頭の中で一冊の本を思い描いていることが判った。

ポラニーの思い描いている一冊の本は、ロックフェラー財団の奨学金という財政援助のもとで、『大転換』として完成する。今度は、ポラニーが「聞き手と評者を必要とした」。ポラニーは、『大転換』の序言に記している。「ドラッカー氏とその夫人は、著者の結論に全面的な同意を与えなかったにもかかわらず、不断の激励の源となり……」。

このように親密な交友関係にある二人のそれぞれの著作の論理構成を、それぞれのキー・ワードとそれにまつわるコンセプトを抽出することによって、以下、「比較」(共通性と差別性の明確化による相対評価)を試みることにする。

2. 「経済人」概念について

ポラニーもドラッカーも、人間の本性を「交換を通じて利得を追求する」ところの「経済人」とする考え方が、人類史の特定の時期の特有の産物であるとすることでは共通している。しかし、そういう認識をする基礎の踏まえ方には、かなりの相違がある。

ドラッカーは、社会のあり方＝「社会の型」の決定要因としての観念形態の独自性にアクセントを置いて「経済人」概念の歴史的な位置づけをする。

ドラッカーの人類史的な歴史観の基本的な命題は、「キリスト教の伝来以

来、ヨーロッパの歴史は、自由と平等を社会の現実に投影することの歴史である」（岩根忠訳、ダイヤモンド社刊『ドラッカー全集』第1巻、39頁。以下、ドラッカーの著作からの引用は、特に注記するもの以外は、この書に依り、引用文の該当頁を記入する。傍点…原訳書）といった、きわめてヘーゲル的な色彩をもったものである。ヘーゲルの「世界精神」に匹敵する「自由平等」の希求について、次のように述べている。

「自由平等の実現を、はじめは精神界で求めた。現世のかなたにある世界では人みな平等であること、その世界における運命を、現世の所業と思索できめるのは、人おのおのの自由であること、いわば現世は、真の生活の準備にすぎないこと。こういう教義は、大衆をおさえる手段にすぎないというのが、18世紀の社会やマルクス主義者のいうところである。あるいは、そのとおりかもしれない。しかし11世紀または13世紀のひとびとには、この約束は現実であった……。この時代は、人間を精神人と見、精神人と考えた。世界におけるその位置、社会におけるその位置を、精神上の秩序における位置と見た。こうして、神学は『精密科学』になった。この秩序が崩壊したあと、自由平等は知的分野に投影されることになった。ルーテルの教義はいう。人はその自由で平等な知性によって聖書を解読し、これによってその運命をきめるものである、と。こういう教義は、ほかに類がないわけでもなく、またこれが最終というわけでもないが、知識人の秩序をあらわすものとして最高の形態である。この秩序が崩壊したあと、自由平等が社会という分野に投影された。人間はまず政治人となり、ついで経済人となった。自由と平等は、社会的または経済的平等となった。人間の存在を説明することもまたその理由も、社会的・経済的秩序のなかに見いだされることになった」（39頁）。

さらに、「自由平等」の希求を投射する領域とその領域における「自由平等」の実現との関係については、次のように述べている。

「自由と平等とは、社会本然の中心領域と考えられるところにおけるもの

でなければならない。しかし、この領域では、自由平等は約束されるだけで、実現されることはない。ある領域で自由平等が実現されるのは、他の領域が社会本然の中心となったあとでできることである。宗教上の自由と平等が実現されたのは、精神の領域が社会の基盤と思われなくなってからであった。形式的民主主義における政治上の平等は、経済上のことが社会の名誉と満足の基盤と考えられるようになってから可能になった。同じように、経済上の平等は、経済的なものが社会でいちばん大事なものと思われなくなったとき、すなわち新しい領域にある自由と平等が新しい秩序をもたらす約束になったとき、はじめてできることになろう」(183頁)。

こういう観点から、ファシズムが「奇跡でなく蜃気楼である」ゆえんも、次のように説明される。

「人間についての新しい考えと新しい秩序があらわれれば、たちまち消えうせる。ファシズムは、すでにくずれた経済人という考えをあらためて否定するだけである」(180頁)。

3. 「社会」と「経済」——その関係の逆転——

これに対して、ポラニーは、「社会」と「経済」の相互関係における逆転という歴史過程に即して「経済人」概念の成立根拠を説明する。

ポラニーの著作における基本的命題は、「普通、経済的秩序は、それを包み込む社会的秩序の一機能であるにすぎない」(吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳『大転換——市場社会の形成と崩壊——』東洋経済新報社刊、95頁。以下、ポラニーの著作からの引用は、特に注記するもの以外は、この書に依り、引用文の該当頁を記す)にもかかわらず、「経済が社会的諸関係の内に埋め込まれるのではなく、社会的諸関係が経済システムの内々に埋め込まれる」(76頁)と西欧の19世紀の特性を規定するところにある。

この命題の特徴は、「古典派(経済)学説の基礎をなすものほとんど正反対である」(78頁)ということにある。ポラニーは、次のように古典派学

説の倒錯を弾劾する。

「正統的教義は、個々人の交換性向から出発し、そこから局地的市場の必然性を、分業の必然性ととも演繹し、最後には、交易の必然性、ついには遠隔地取引をも含む外国貿易の必然性を推論した。だが、現在のわれわれの知識に照してみるなら、議論の順序をほとんど反対にしなければならないだろう。すなわち、真の出発点は遠隔地取引である。それは財の地理的偏在の結果であり、偏在によって生ずる『分業』の結果である。遠隔地取引はしばしば市場を発生させる。そして市場は、交換行為、さらには、もし貨幣が使用されているなら売買行為を伴う制度であり、それゆえ、ついには、——だがけっして必然的ではなく——駆引をしたり値切ったりする例の性向なるものにふけらせる機会をだれかれに提供するのである」（78頁）。

ポラニーは、社会的分業については、「社会と同じだけ古い現象」であるが、それは「性別、地理、個人的才能という諸事実に内在する差異から生ずる」（58頁）ものであるとする。そうして、「いかなる社会であれ、何らかの種類の経済をもたなければ、瞬時たりとも存続できない」が、「西ヨーロッパで封建制が終焉を迎えるまでの既知の経済システムは、すべて互恵、再配分、家政、ないしはこの三つの原理の組合せにもとづいて組織され」（72頁）、「経済秩序は、それを包み込む社会的秩序の一機能であるにすぎなかった」という。

ところが、「すべての所得が販売から生まれ、商品もっぱら購買行為によってのみ入手できるという市場経済⁵⁾は、「社会諸成員の行動動機の変化を含意する」（54頁）とし、次のように説明する。

「ひとたび社会がその成員に対して一定の行動を要請し、現行の制度によってその行動をほぼ強制することができるようになれば、人間の本性についての意見は、現実がどうであろうと、その理想型を反映することになる」（98頁）。そのように「社会の型はすべて経済的要因に制約されている」のだが、「ただ19世紀文明だけは、これとは違う独特な意味で経済的であった。

……すなわち、利得動機に基礎を置くことを選んだ」(39頁)。

このように、ボラニーは、古典派学説の倒錯の産物である「経済人」仮説が、そのまま現実に投射し、「社会諸関係が経済システムの内に埋め込まれる」⁶⁾ことになった19世紀文明の特殊性を説明する。

4. 「教義の崩壊」と「社会システムの崩壊」

1930年代の「大転換」は、ドラッカーのように人間——とりわけヨーロッパ人——が自分たちの存在の意義をどのように観念しきたったかの形而上学的観点にアクセントを置けば、「経済人(概念)の終り」となる。また、ボラニーのように「経済」と「社会」の相互関係の観点に立てば、「市場社会の崩壊」として捉えられる。両者は、同じ事柄の違った側面からの表現なのであるが、問題は「大転換」のプロセスをどちらがより克明に論理的に解析しえているかである。

ドラッカーは、「ファシズムの真の原因」について「われわれの住む世紀における基本的経験、すなわち新しい教義と新しい秩序に欠けていることから起る」(64頁)と、きわめて啓示的な表現をしている。この文言は、まさに二人の偉才の「^{ライフェ}文筆家」によるロンドン郊外での対話における問題意識の集約を偲ばせるほど、凝縮された抽象的表現である。しかし、この集約に至る「われわれの住む世紀における欠けている基本的経験」とは、いったいどのようなものことなのかと問い直すと、ドラッカーの『経済人の終り』は、われわれを了解させるだけの突っ込みに欠けている。というのは、ドラッカーは、「何がくずれたのか、なぜ、また、どのように」(18頁)と、きわめて本格的な問いでもって出発するのだが、その「何か」は、ドラッカーのこの初期著作では、文字通り「経済人の終り」という概念領域にピントが絞込まれるあまり、そこに拘泥してしまっているからである。すなわち、次のように述べている。

「経済人という考えがくずれたために、人はその社会秩序を失い、その世

界は合理的あり方を奪われた」（42頁）。

また、「社会における個人の存在は、合理的な力とか意味のわかる力に動かされているのではなくて、目に見えない悪魔、道理を知らぬ悪魔の暴力のままになっているのだということを、ヨーロッパ大衆は大戦と大不況を通じてはじめて悟った」（48頁）。「こういう経験をするのは、戦争や不況が本質的にもっているもののためではなく、われわれが社会の基礎についてもつ信念がくずれたためである。この信念がくずれたから、戦争や不況を生み出すような不合理な社会を、合理的存在としての個人と調和させられなくなる」（50頁）。

ドラッカーのこの説明は、〔A〕「社会秩序の喪失（戦争の暴力・不況の暴力＝“悪魔の再来”）」と、〔B〕「社会の基礎についての信念の崩壊」との関係については、循環論法の域を出るものではない。次の文言は、ドラッカーもそのことに気付いていたが糊塗したとしかいいようのないものである。

「戦争や不況が非合理的となったのは、その本質が変わったためなのか、またはこれを見る人の信念が変わったためなのかというのは、一般人にはどうでもよいことである。人間存在の合理的説明ができなくなり、人間の合理的機能が失われたのは、社会を動かす力が非合理的となったためなのか、または社会について人が持つ合理的な考えがくずれたためなのかという詮索には、ひとびとは無頓着である。世界はなんの秩序もなく、世界はなんの法則にも従わないということだけが大事である」（53頁）。

かくて、「一般人、ひとびとにとっては……」という“口実”によって、^{ライター}「文筆家」としてなされるべき「詮索」を雲散させてしまっている。

ドラッカーは、「社会は、この考え方（＝人間本性についての考え）を受け入れて、これと同体となる」（35頁）と観念形態と社会の実体とを無媒介に直結している。これに対して、ポラニーは、先の引用からも読み取れるように、社会諸成員の行動動機に変化をもたらすような制度の形成過程を重視する。

ポラニーは、この形成過程においては、たんなる人間本性についての仮定概念ではなく、「市場システムを創造しようとした社会の組織原理」(184頁)として「経済的自由主義」という政治的性質をもった「主義」が展開されていることに着目する。その「主義」の政治的作用によって形成された社会システム(「制度」)が、社会諸成員の行動動機を変化させ、人間が一定の本性についての仮定概念に適應することを強制される。その仮定概念そのものが、人間の本来ある姿、性質に即したものであるかどうかが基本的な問題であり、そもそも組織原理としてのこの「主義」が人間本性に即したものでなかったがゆえに、その出発のところから、いずれは、その「主義」によって形成される社会システムは、人間の本性から起る社会行動(=「社会の自己防衛」)によって崩壊せざるをえないものである。そうして、これまでの組織原理とは、別の組織原理による社会に取って替られる。ポラニーの『大転換』の大筋の論理は、このようなものである。

ドラッカーの第1作『経済人の終り』は、歴史過程に現実に生起してきている「市場」というファクターに人間がいかに対応してきたか、また対応すべきかの考察・詮索を端折ったために、後に自ら反省するように「社会を『観念』と『(暴)力』の角度から分析している」⁷⁾ことに終始する「抽象化」された記述の作品となっている。第2作『産業人の未来』では、「経済人(概念)」は「商業中心社会」という社会的実在の領域まで具象化された捉え方になるが、「市場」への対応の問題が論じられるのは、第3作『会社という概念』(1949年)においてである。その場合、第1作『経済人の終り』における「非経済的社会」指向の論調はすっかり払拭され、コペルニクス的転回を遂げることになる。このことの詳しい検討は、後続の論稿(その3)において行う。ともかく、ドラッカーの連作をそのまま追跡していても、この「転回」は突然変異的な飛躍であるので、ここでは、この検討の予備としても、ドラッカーの良き「対話者」であったポラニーの見解によって断絶的な空隙を補完しておきたい。

5. 最初の転換——「統制的市場から自己調整的市場へ」——

ポラニーの『大転換』は、それが書かれるべくして書かれたとき、ドラッカーの『経済人の終り』が前座であるとすれば、真打の登場のようなものであった。ポラニーは、初陣のドラッカーのように循環論法の自縛におちいることなく、真打として「大転換」のプロセスを見事に説き明かしてくれている。循環論法を超えるには、ものごとの「起源」が誤りなく把握され、それを基底にして、起るべくして起ったものごとの本質が解明されねばならないのである⁸⁾。

ポラニーは、「経済的自由主義」によってなされた政治的作用について、「途方もない力をもつ自己調整システムへの市場の変換は、市場に内在するいかなる異常成長傾向の結果でもなく、むしろ、社会全体に投与されたすこぶる人為的な刺激剤の効果だった」（77頁）という。

すでに述べたように、19世紀前においては「経済が社会的諸関係の内に埋め込まれている」。「典型的な局地市場は（未開社会を含め）、時と所を問わず驚くほど広がりを見せている」にしても、「それは地域生活の一付属物であり」（83頁）、「自余の領域を犠牲にしながらかがって行く傾向をもってはいなかった」（91頁）。「（遠隔地取引）市場の所産である（中世の自治）都市は、市場の守護者であっただけでなく、市場が農村へ拡大し社会の支配的経済組織を蚕食することのないよう封じ込める手段でもあった」（82頁）。

「15、16世紀における領土国家の意識的行動」（86頁）である「重商主義の政治技術には、対外政治における支配力を得るために全国土の諸資源を整備するということが含まれ……経済の領域においては……取引と商業が国の全土に拡大し、経済活動の支配形態になった」（87頁）。しかし、「重商主義が行なった取引の『自由化』は、取引を（封建的、自治都市的）排他主義から解放しただけであり、それは同時に統制の範囲を拡大した。経済システムは一般的な社会的諸関係の内に沈み込んでいた。市場は、いままで以上に社会

の権威によって管理され統制される一つの制度的道具立てとして、たんなる付随の特徴であるにすぎなかった」(88—89頁)。

抜粋による要約であるが、以上がポラニーによる「産業革命の時代に至る市場の歴史の概観」である。

ところで、「人類史の次の(産業革命以後の)段階は、自己調整の大単一市場を確立せんとする試みへと向った」(88頁)。「18世紀末における統制的市場から自己調整的市場への移行は、社会構造における根底的な転換を表現するものだった」(95頁)。

この転換が「根底的な」といわれる意味は、本来商品でない労働、土地、貨幣までが「擬制^{フィクティシヤス}」商品としての取扱いを受けるということにおいてである。商品は、経験的に、市場での販売のために生産されるものと定義される。しかるに、労働は販売するために生産されるものではなく、生活それ自体を伴う人間活動の別名にはかならない。「労働はあらゆる社会をつくりあげている人間そのものであり、土地はそのうちに社会が存在する自然環境そのものである。したがって、それらが市場メカニズムに包摂されるということは、社会の実体(Substance of society)そのものが市場の諸法則に従属させられることを意味する」(95—96頁)。また、「現にある貨幣は購買力の象徴にかならない。それは一般には、けっして生産されるものではなく、金融または政府財政のメカニズムを通して出てくるものである。これらはいずれも販売のために生産されるものではない。労働、土地、貨幣という商品種は、まったく擬制的なものである」(97頁)。

同時に、これらの「擬制商品」は、産業生産の重要な生産要素である。「これらの生産要素が売買しうるものでなければならなかった」ところに、ポラニーは「商業社会における工場制度導入の必然的帰結」(100頁)を認める。この「必然的帰結」は、ポラニーにとって、あくまで「商業社会における」ものであって、したがって、産業生産、工場制度導入は別の形態においてもありうるということを含意していることに、ここでは注意しておきたい。

さらに、この認識のうえで、経済的自由主義は、次のように性格づけの規定がされる。すなわち、この「必然的帰結」を効果的に到来させ、維持するための「社会全体に投与されたすこぶる人為的な刺激剤」であること。そうして、次の三つの明確な教理をもつことで、18世紀半ばに登場した「自由放任」といった「気まぐれな風潮」(184頁)を超えるものであるということである。ポラニーの規定する経済的自由主義の教理は、次のようである(184—185頁)。

- ① 「労働は市場において価格を見いだすべきこと」(——労働市場の形成とその維持——)
- ② 「貨幣の創造は(市場の)自動メカニズムによるべきこと」(——「商品貨幣」としての金を通貨価値の基本に置く金本位制——)
- ③ 「財は妨害や特恵なしに(商業取引によって)国から国へ自由に移動すべきこと」(——国際自由貿易——)

ポラニーは、この教義の人為的・政治的性質について次のようにいう。「自由放任は、自然なところは何もなかった。自由市場が成行きまかせて生じてくるはずはなかった。……自由放任自体も国家によって実現された」(189頁)。「市場システムと干渉は互いに相容れない言葉ということでは決してない。／市場が確立されないうちは、その確立のために、そしていったん確立されればその維持のため、経済的自由主義者は政府の干渉を求めなければならぬし、また躊躇なく求めるものである」(202頁)。

「市場のみによって統制され、規制され、方向づけられる経済システムであり、財の生産と分配の秩序はこの自己調整的なメカニズムにゆだねられている」ところの「市場経済」、そうして、その経済に社会的諸関係が埋め込まれる19世紀の「市場社会」の歴史的・相対的な特殊性を、ポラニーは以上のような論理構成によって明らかにしている。

6. 「社会の自己防衛」

ドラッカーは、『経済人の終り』において、経済的自由主義に匹敵するものを「教義としての資本主義」と表現し、「資本主義を自由平等達成の手段とすることが誤りなことは、ヨーロッパでは1848年までにわかっていた」（41頁）と述べている。

1848年というのは、ヨーロッパの政治的動乱の下で『共産党宣言』が発表された象徴的な年である。一つの教義が誤りであると認識されるには、それとは別の教義という対照の登場も有力ではあるが、歴史的過程の本質の解明としては、「社会の組織原理」としての教義のフィージビリティを社会的実体の進展との対照で検証することが必要である。ポラニーは、そうした観点からの検証により、「自己調整的市場という考えは、まったくのユートピアであった」（4頁）という命題を立てている。

「ユートピア」というのは、その説き描くとおりの実体は存在しないというものであるが、「自己調整的市場」という経済的自由主義の概念も、それが人間本性に即しないものであるがゆえに、「社会の自己防衛」を必然的に誘発し、そのことによって教義どおりの社会的実体の形成・進展は阻まれた。ポラニーは、そのことを社会史的・経済史的検証によって詳しく解明しているが、論理的に要約するならば、その要点は次のようである。

「市場経済が、（「擬制商品」の導入によって）社会の骨組みの人間的・自然的構成要素に対する脅威であるならば、ある種の保護を求める強い衝動がさまざまな人々のあいだに生ずる。「こうしたことは人々のあいだに理論的あるいは知的先入見がなくても起る」（203頁）。「自由放任経済が意識的な政府活動の産物だったのに対し、それに続く自由放任の規制は自然発生的に始まった」（191頁）。

「19世紀の社会の歴史は、それゆえ二重の運動の結果であった。すなわち、本来の商品に関する市場組織の拡大は、擬制商品に関する拡大の制限を

伴った。一方では、市場は、地球上の全地域に広がり、そこにまきこまれる財の量は信じられないほど増大したのに対し、他方では、もろもろの措置と政策の網の目が、労働・土地・貨幣に関する市場の動きの規制を意図して強力な諸制度へまとめあげられた。世界商品市場、世界資本市場、そして世界貨幣市場の組織は、金本位制の庇護のもとで市場メカニズムに未曾有の勢いを与えたが、他方では、市場に支配される経済のもたらす有害な影響に抵抗するためにひとつの根本的な運動が姿を現わした。社会は、自己調整的市場システムに内在するさまざまな危険に対しみずからを防衛した。——これがまさにこの時代の歴史の一つの包括的な特徴であった」（101頁）。

このようにポラニーは、いわゆる「資本主義社会」なるものを「経済的自由主義の原理」と「社会防衛の原理」が相剋する「複合社会」として捉え、その相剋の「ディレンマ」が、「ついには、市場システムを基礎とした社会組織を崩壊させた」（4頁）と立論する。

この相剋の「ディレンマ」については、「大転換」の本質の認識に関わることであり、社会的矛盾は階級闘争として現出し、展開されるというマルクス主義の教条との「比較」（共通性と差別性の吟味）が必要となる。この「比較」は、なぜ、歴史の操縦桿が肝心の時期にマルクス主義に委ねられず、ファシズムという試行錯誤とその超剋の径路で与えられたかという疑問を解くことにも通じていくことになる。

7. 「階級闘争」について

ポラニーは、マルクスの教義を「社会の全体性と人間の非経済的本質」を「心髄」とする根本的な「哲学」の側面と、「俗流マルクス主義」へと導く「社会発展に関する粗雑な階級理論」の側面との混成として把握している（206頁）。このうち、前者の側面でのポラニーの継承については、彼についての「伝記的評論」において、次のように述べられている。

「マルクスは、1844年の『経済学・哲学草稿』のなかで、商品の物神性、

物象化、疎外などの諸側面について実に丹念にその概念を練りあげたが、これらはいずれも、ポラニーが長年自分の研究の中心に考えてきたものであり、また後に『大転換』のなかで歴史的な次元について彼が探求したものであった⁹⁾。

この批評の妥当性は、われわれがこれまで見てきたポラニーの論理構成によっても十分に首肯しうるところである。ところで、問題は、後者の側面について、どういう点において、マルクス主義の教義は「粗雑」だと批難されるのであろうかということである。

ポラニーは、いう。「歴史を説明する場合、所与の諸階級の経済的利害に多くをたよりすぎてはならぬ」(212頁)と。そのことをより具体的には、次のようにもいう。

「実際、労働市場は新たな産業システムの下で最後に組織される市場であり、市場経済がすでに発展の緒についてしまい、労働市場のないことは、その導入に伴うはずの惨禍よりも一層大きな災難であると大衆自身にさえ判明しつつあるときになって、はじめてこの最終的措置がとられた。結局、自由労働市場は、その創出の際にとられた非人道的方法にもかかわらず、すべての関係者にとって、貨幣収入の面では恩恵を与えることが判明したのである」(103頁)。

これは、いうまでもなくマルクスのいわゆる「資本主義的発展における窮乏化」理論の否定である。

ポラニーは「階級の利害は、本来、経済的なものでなく、社会的なものである」として、次のように説明する。

「欲望充足にかかわるような純粋に経済的な事象は、社会的承認の論点に比べれば、階級行動の説明にとって持つ意義は比較にならないほど小さい。もちろん、欲望充足は、このような承認の結果、とりわけその外形的な徴証ないし褒賞であるかもしれない。しかし、ある階級の利害は、最も直接には、身分と序列、地位と安全とに関連している」(209頁)。

こういう見解の立脚点は、「経済的社会は、人間の法則にあらざる法則に支配されたのだ……。それゆえ社会を人間的世界に再統合することが社会思想の進化による絶えざる追求目標となった」（170頁）という基本的認識である。

そうして、この観点からして「マルクスの経済学は、そうした目的達成にとっては、本質的に不成功な試みだったのであり、その失敗の原因は、マルクスがリカードと自由主義的経済学の伝統にあまりにも執着しすぎたせいである」（170頁）と判断する。これは、俗言でもってすると、「ミイラ取りがミイラになった」という判断の仕方である。ドラッカーは、その点を「ブルジョワ資本主義とその同体双生児でありながらけんかばかりしているマルクス社会主義」（71頁）と評し、「経済原則に『自働性』を認め……この『自働性によって人は意思の自由を奪われ、それぞれの階級のあり方に従うことになる』（40頁）ところの「マルクス版の経済人」ときめつけていることは、すでにこの論稿の（その1）で見たところである。これは、ポラニーの「歴史を説明する場合、所与の階級の経済的利害に多くをたよりすぎてはならぬ」という命題と軌を一にしているものといえるであろう。しかし、ポラニーは、ドラッカーのように、たんにきめつけをするのでなく、「社会変化において階級利害が本質的役割を演ずるのは、事の本性に根ざしている」（208頁）と次のようにいう。

「なぜなら、広範な変化はどのようなものであれ——たとえそれが地理的位置や経済的・文化的条件の差異を理由にするものであっても——さまざまな社会的階層に異なったかたちで影響を及ぼすに相違ないからである。個別的利害は、それゆえ社会的・政治的变化の自然な媒介者なのである。変化の原因が戦争であれ、貿易であれ、驚異的発明であれ自然環境の変化であれ、もろもろの社会的階層は、それぞれに異なる適応方法（強制的方法も含めて）を求め、また互いに覇を競い合う他の諸集団とは異なるやり方でおのれの利害を調整するだろう。それゆえ、変化を実現させた一ないし数集団を指摘で

きた時にのみ、その変化がいか^んかにして起^こったのかが説明されるのである。しかし、究極の原因は外的な力によって与えられるのみであり、社会が内的な力に依存するのは、ただその変化のメカニズムについてだけである。『挑戦』は全体としての社会に対して行なわれ、『反応』は集団、階層、階級を通して現われるのである」(208頁)。

8. 「世紀の基本的経験」とは

ポラニーがいう「社会変化に対する階級利害を通じての『反応』」というものは、きわめて経験的検証でもって認識しうるものであり、それがマルクスの階級闘争理論におけるような「経験的検証の可能性を完全に除き去った」¹⁰⁾ところの「未来」(共産主義社会)への社会発展の法則(史的唯物論)を「向自的」(für sich selbst)に荷う階級の「歴史的使命」というものとは、まったく異質のものであることに、ここでは注目させられる。ポラニーは、マルクスの人間疎外とその克服に関する根元的な「哲学」には同調するが、その思弁的「歴史哲学」には真っ向から異議を提起している。すでに『大転換』の著作に先立って、未刊の原稿で次のように記している。

「人間の歴史が人間の意志と行為から独立した法則によって支配される、というような信仰ほどばかげた迷信は未だかつてないものだ。われわれをどこかで待ち受けている未来、といった未来概念は無意味である。なぜなら、未来というのは、現在にもあとにも存在はしないのだから、未来とは、現在に生きる人々によって絶えず作り直されているものなのだ。現在だけが現実である。現在のわれわれの行為に対して有効性を与えうる未来などはどこにもない」¹¹⁾。

こういうものごとの捉え方の基本的姿勢は、ドラッカーにも共通している。「行きたいところから出発するのではなく、いまいるところが出発点だ」(416頁)がそれである。

先験的な「歴史哲学」にわざわざされないだけに、ポラニーは「社会主

義」の概念について、「それは自己調整的市場を意識的に民主主義社会に従属させることによって、これを乗り越えようとする産業文明に本来内在する傾向のことである」（312頁）と「此岸」的な捉え方をする。

これに対して、ファシズムの本質については、「自由主義的資本主義が行きあつた難局に対するファシストの解決は、経済・政治双方の領域におけるあらゆる民主的諸制度の撤廃という犠牲を払って達成される、ひとつの市場経済改革である」（316頁）と規定している。

以上のようにポラニーが綴ったコンテクストを辿って、ここにわれわれは、ドラッカーが抽象的に啓示的にしか述べなかつた「ファシズムは、われわれの住む世紀における基本的経験、すなわち新しい教義と新しい秩序に欠けていることから起る」という命題の具体的意味について理解に達しうる。すなわち、欠けている「基本的経験」とは、「自己調整的市場」に対する民主主義という政治的实践の方向と性質に関わることなのである。

ところで、ポラニーは注意深く、「民主主義」と併せて「大衆政治」という状況表現的用語を用いている。そうして、「社会主義」については、「意識的傾向」性を問題にする。この意識性が思弁的な「歴史哲学」による「階級意識」でないことは、もはや既述のことから明らかである。それは、思弁的に「待ち受けている未来」のためではなく、此岸的な「社会を諸個人のきわだって人間的な関係に変えようとする努力の継続」（312頁）としてである。

しかし、ヨーロッパの1920年代の現実には、マルクスの説く思弁的な意識性が社会思潮を風靡し、「大衆政治」状況と渾然一体となる。そのところに、「俗流マルクス主義」の「粗雑」さをポラニーは摘出したものといえるであろう。その粗雑さは、「社会を人間的世界に再統合」し、「経済を社会的諸関係の内に埋め込む」よりも、「社会に対する直接的な危機をつくり出し」、これが「ファシスト的局面」を招来する。このことをポラニーは、次のように述べている。

「雇用主は、工場や鉱山の所有者であり、したがって社会における生産の

遂行には、(利潤に対する彼らの個人的利害関係はまったく別として) 直接責任があった。一方、被雇用者は社会の大きな部分を代表していた。彼らの利害もやはり、全体としての社会の利益と相当程度一致していた。……しかしながら、産業もしくは国家——そのいずれかあるいは双方——の機関を麻痺させるような結果を招く集団利害の衝突は社会に対する直接的な危機をつくりだした。まさに、こうした事態が、20年代に生じた。労働者は、その数をもって勢力を得た議会にたてこもり、資本家は産業を国に君臨する要塞へと変えた。大衆団体は所与の産業形態の要請を無視し、容赦ない経済への介入をもってこたえた。産業の将軍たちは、国民自身が自由に選んだ支配者に対する国民の忠誠心をぐらつかせ、一方民主主義団体は、すべてのものの生活がかかっている産業組織に対して闘いを続けた。ついに経済および政治制度の双方が完全な麻痺に陥る瞬間がやってきた。恐怖が人々を捉え、主導権は、最終的代価がなんであれ安易な方法を申し出た者に押しつけられた。ファシストによる解決の機が熟した」(314-315頁)。

9. 「階級構造の変容」について

このような歴史的な検証(教訓)を踏まえて、ボラニーは次のような一連の命題を列記している。

「① 階級利害は社会の長期的動向に関しては限られた説明しか与えてくれない。

② 社会の運命が諸階級の要求によって決定されるよりは、諸階級の運命が社会の要求によって決定されることのほうがずっと多い。

③ 一定の社会構造が与えられれば、階級理論でうまく説明がつけられる。しかし、社会構造自体が変化をこうむれば……機能を停止した階級は分解し……新しい一階級ないし数階級に取って代られるかもしれない。

④ ある闘争における諸階級の成敗は、自身の成員以外から支持を獲得できるか否かにかかるだろうし、この後者はまた、自身の利害よりもいっそう

広範な利害によって課せられる任務を達成できるか否かにかかるであろう。

⑤ このように、階級の誕生も死滅も、その目標も、その達成の度合いも、その協同も敵対も、すべて全体としての社会の状況を離れては理解できない」（207頁）。

これらの一連の命題は、後にダーレンドルフが、マルクスの「階級構造の発展に関する四つの強調」として整理したものと対比してみると、実には確かな判断を下したものと評価できる。ダーレンドルフが、「マルクスの二階級（ブルジョワジーとプロレタリアート）モデル」ということで整理したものの要点は、次のようである。

「① 資本主義には、階級がますます両極分解をとげるという、固有の傾向がある。

② 階級が両極分解していくにつれて、それぞれの階級的地位の開きはますます極端になる。

③ 同時に二つの階級はますます内部的に同質的なものとなる。

④ ひとたび歴史がこのような発展傾向を極限までおしすすめるや、現存の社会構造の建築物が崩れ、革命が資本主義社会を終焉させる時がくる¹²⁾。

ダーレンドルフの『産業社会における階級と階級闘争』（1957年）は、「マルクスは社会学的な階級理論をヘーゲル哲学と『巧妙な定義のトリック』によって結びつけ、かくして『社会学的に無意味な命題』をつくりあげている」ことを解析し、それを基礎に「現代社会の構造原理とその動態についての理論的認識」を形成した体系の大作である¹³⁾が、マルクスの階級闘争理論の経験的検証による超剋ということでは、ポラニーはその先駆者であったと評価できる。

しかし、ポラニーは、社会の階級構造の変容（先に引用した一連の命題のうち③）については、上記のように命題を提起しただけで、分析的な叙述はしていない。その点、ドラッカーは、第2作『産業人の未来』において「現代産業組織の社会現象」についてポラニーの考察が及ばなかったこの領域の独

自的な分析をし、新たな経営上の権力を構成する経営者層の登場を自らの視野のうちに取込んでいる。また、第1作『経済人の終り』の段階から、「生産単位が拡大するにつれて、中間にある特権地位がふえた」(22頁)という指摘をし、「資本主義では生産単位がしだいに拡大する傾向があり、その必然の結果として、少数の搾取者を別とすれば、あとはみな平等なプロレタリアしかない社会構造になる」という、いわゆる「マルクスの二階級モデル」に背反する事実の趨勢に注目している(21頁)。そうして、そういう趨勢は「生産機能が完全に社会化された社会主義の国でも」共通しているところから、「社会主義の国では、社会階級が形成されるような正当な理由がない」とする「マルクス主義信仰」のよりどころの喪失を指摘している(22頁)。

ドラッカーが、ポラニーを超えた独自性でもって提起したこれらの問題については、この論稿では後にバーナムの「経営者革命」論との比較により、吟味していくことにする。

10. 「社会主義」と「産業社会」

先に述べた「われわれの世紀の基本的経験」として、そこに何が欠けていたかの解釈については、「俗流」でなく「正統」と自称するマルクス(=レーニン)主義の立場からは反論が提起されるであろう。

「社会主義」というのは、ポラニーのいうような、たんなる「意識的な傾向」だとか、「努力の継続」といったものではない。現にロシアにおいて成立している社会的実体なのだという反論である。そうして、「欠けている」ものは、ロシアのそうした経験を、いわゆる「先進資本主義世界」に普及しえていないということに絞られてしまうであろう。

もちろん、ポラニーもロシアの現実を無視して、「われわれの時代」を論じたりはしない。次のように述べている。

「社会主義経済がロシアで確立し、まったく新たな出発を示した。この冒

険的事業を生じさせた諸条件からして社会主義経済が西ヨーロッパ諸国に適用しがたいものであったとはいえ、ソビエト・ロシアの存在そのものは痛烈な影響力であることが判明した。たしかに、工業や読み書きできる人々や民主主義的伝統——この三つはすべて、西ヨーロッパ的観念においては、社会主義の前提条件であった——が無いのに、ロシアは社会主義に転じたのであった。この点が、ロシアのとった手段や解決方法を他で応用できないものにしてきた」（313頁）。

ポラニーのこの論評は、きわめて本質的な問題の捉え方をしているが、これ以上に深く立ち入った記述をしていないので、筆者なりの敷衍を試みよう。

1917年の「10月革命」を「社会主義革命」だとするのは、マルクスの見地からすると、異常な胎外出産のようなものであったといえる。なぜなら、マルクスにおいては、「一つの社会体制は、自らの駆使しうる生産力によって発展の余地がなくならないうちは、決して没落することがない」（『経済学批判』の序言）のであるから、「資本主義的」工業の発展が後進的なロシアでの社会主義革命はそういうことになる。

しかし、この問題は、ポラニーの見地からすると、まったく異なったものになる。ポラニーは、「人は、社会変動を生みだすために非人格的な機構を待ってはられない」¹⁴⁾という立場でマルクス主義の決定論に反対していた。したがって、「商業社会における工場制度の導入」の形態をとらない「産業社会」が、ある政治的作用の結果として創出されても、別に異常出産のわけでもないのである。ただ、それを「社会主義」と解するかどうかは、また別の問題のわけであり、——後に見るようにパーナムはそういう解釈を拒否しているが——、ポラニーは、ボルシェビキーの「冒険的事業」の産物をあえて「社会主義経済」と表現している。

ポラニーがそのように取扱う基底には、「経済システムの視点からすれば、これ（＝『全体の社会という視点からする』）既述の社会主義の定義」とは反

対に、社会主義は、私的な貨幣所得を生産活動の一般的誘因とすることをやめ、主要な生産手段の処分を個人の権利とは認めないものであるという点で、それは眼前の過去からの根底的な離脱である」(313頁)という、社会主義についてのもう一つの考え方がある。

「全体としての社会という視点」からの把握と「経済システムという視点」からの把握というように、ポラニーの「社会主義概念」は、これまた複合的なものである。あるいは、それがポラニーのディレンマとってよいかもしれない。ともあれ、「社会主義」をどう定義しようと、ポラニーが一貫して追究しているものは、次のように述べていることである。

「私が願うのは、生産者として毎日の活動において人間を導くべき、あの動機の統一性を回復することであり、経済システムを再び社会のなかに吸収することであり、われわれの生活様式を産業的環境に適応させることである」¹⁵⁾。

このポラニーの「経済システムを再び社会のなかに吸収する」という基本的指向からすると、ボルシェビキの「冒険的事業」の産物は、「経済的システムの視点」からは「社会主義」の条件をかなえていても、「全体の社会という視点」からすると、「社会を諸個人のきわだって人間的な関係に変えようとする努力」において問題のある「社会主義」ということになるであろう。

ポラニーのいう「主要な生産手段の処分を個人の権利とは認めない」という「社会主義」の課題は、マルクスの主張する「生産手段の私的所有の廃止」と近似したものであるが、イコールというものではない。マルクス＝レーニンにおいては、その課題は「暴力(革命)」によって果されるとされているが、ポラニーにおいては、それは「西ヨーロッパ諸国に適用しがたい」ものである。しかし、ポラニーは、「眼前の過去からの根底的な離脱」を要求する。このあたりが、ドラッカーの『『保守的アプローチ』には全然同調しなかった』理由であろうと考えられる。

しかし、歴史の現実には、「主要な生産手段の処分を個人の権利と認めない」方向を、ポラニーが予想する「根底的な離脱」に於ける難壁¹⁶⁾を越える体制の自己変容として進展させた。それは、ドラッカーが『産業人の未来』で取扱った革命の有無に関わらない『「財産＝社会的権力」の考えの放棄』（この〔研究ノート〕の（その1）に既述）に向かう歴史の趨勢である。ドラッカーは、第2作を通じて、ポラニーを越える独自性——とりわけ「現代産業組織の社会現象」の考察において顕著——の形成へと向かっていた。それらについては、この回の〔続〕においてバーナムとの「比較」を盛込んで扱うことにする。

〔注〕

- 1) 特に別の注記をするもの他は、ポラニーとドラッカーの交友関係については、ドラッカーの『傍観者の時代』（*Adventures of a Bystander*）（風間禎三郎訳，ダイヤモンド社刊）の「ポラニー家の人びと」の章の記述に依る。
- 2) この論文のことについては、ポラニーの娘であるカリ・ポラニー・レヴィットの「カール・ポラニーの思想と人生」（『経済評論』1986年7月号，8月号掲載）を参照。同誌1986年7月号，6—7頁。
- 3) ドラッカーは「^{ライフ}文筆家」と自称するとともに「傍観者の時代」の「日本語版への序文」では、「政治生態学者」（＝「環境保護運動が自然環境に関心を払うように人工の環境に関心を払う者」）と自己規定している。^{ライフ}「文筆家」のこの定義は、岡本康雄著『ドラッカー経営学』（東洋経済新報社刊）に寄せた「序文」に見られる。
- 4) 前掲注2），『経済評論』1986年7月号，11頁。
- 5) カール・ポラニー著『時代遅れの市場志向』，玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』（日本経済新聞社刊）に所載。同書，46頁。
- 6) 同上書，48頁。
- 7) ダイヤモンド社刊『ドラッカー全集』へのドラッカーの序文「文筆家兼学徒としての著作に対する回想」を参照。
- 8) ポラニーの『大転換』の原書における副題は、「現代の政治的経済的起源」（*The Political and Economic Origins of Our Time*）である。
- 9) 前掲注2），『経済評論』1986年8月号，9頁。
- 10) R. ダーレンドルフは、次のようにいう。「マルクスの著作は、経験的検証の可能性を完全に除き去った公準なり理論なりをふくんでいる。たとえば、資本主義は歴史における最後の階級社会であるとか、共産主義社会は人間的自由の完全な実現を

もたらすというような命題は、論駁され否定されうるかもしれないが、しかし科学の用具を用いて反論できる命題ではない。もっと正確に言えば、このような公準ないしはそれから演繹された命題を反証できる経験的データがあると想像することは、不可能である」(富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社刊, 37頁)。

- 11) 前掲注 2), 『経済評論』1986年8月号, 3頁。
- 12) 前掲注 10), 訳書 44—46頁。
- 13) 同上書における「訳者解説」参照。特に 400頁と 445頁。
- 14) 前掲注 2), 『経済評論』1986年7月号, 16頁。
- 15) 前掲注 5), 訳書 52頁。
- 16) ポラニーは、「(西欧の) 社会主義政党による資本主義経済の改革がむずかしい究極的な理由」について、「財産制度への干渉を決定するかもしれないという可能性だけでも、自由主義経済にとってはきわめて重要な信頼、つまり財産権への絶対的信頼をくつがえすことになるからである。財産権の実質的内容は立法府の手で再定義されうるとしても、その形式的継続性の保証が市場制度の機能にとっては重要なことだ」(吉沢・野口・長尾・杉村訳『大転換』313頁)と述べている。なお、ポラニーは、「市場を社会に埋め込む」という今日でいう「混合経済」を指向していたといえる。したがって、「市場制度の機能」を全面的に否定するわけではない。そこに「財産権への干渉」との関係で、「根底的な離脱」の難しさを述べたと解することができる。